

## 発達障害児の教育をめぐる2つのはざま：

窪島務(著)『発達障害の教育学「安心と自尊心」にもとづく学習障害理解と教育指導』を読む

近藤龍彰

(富山大学)

### 1. はじめに

2019年1月に発行された、『発達障害の教育学』(窪島, 2019; 以下, 本書)は, 発達障害, 特に学習障害, の心理および教育を理論的にまとめたものである。もちろんそれは単なる解説ではなく, 「学習障害とは何か」という根本的な問題を提起するものである。そこには, 研究が進んだ現代において, 学習障害とは何かについて, 解明よりもむしろ混乱が生じているという危惧から出発している。本書では, 何が, なぜ混乱しているのかを解きほぐし, 今後の発達障害, 学習障害への教育を構想する手がかりを与えている。

本書は特別支援の領域では注目を集め, すでにいくつかの書評がなされている(岡, 2020; 堤, 2019; 梅原, 2019)。これらの書評は本書の内容とポイントを端的にまとめており, 概略を理解するうえで有益な情報を与えてくれる。ただし, 書評という形式の性質上, 研究的視座からの解釈や論考まで踏み込んだものは見られない。本書が提起している問題は深く, 多様な読み取り方を誘発する。したがって, 内容紹介から一步踏み込み, どのように解釈できるのかの議論を行っていくことは, 本書にとっても, 発達障害の教育の理論および実践にとっても重要であると思われる。加えて, 本書の問題提起は, 特別支援の領域のみならず, 広く心理学にも向けられたものと考えられる。本論文(以下, 本論)では, 本書のエッセンスを抽出し, 今後の発達障害の理解と教育への示唆を見出すことを目的とする。なお, 以下では,

本書の執筆者を「著者」, 本論の執筆者を「筆者」と表記する。

### 2. 本書の概略

本書は全11章で構成されている。第1章「発達障害と学習障害」では, 学習障害の用語の歴史的経緯とその実態が述べられている。第2章「読み書き障害(dyslexia)の概念」では, ディスレクシアの用語の(誤解も含めた)解説と理論モデルの紹介がなされている。第3章「2000年以降の米国LD事情」では, アメリカにおけるLDへの教育的介入(特にRTI)の実情が描かれている。第4章「読み書き障害の主要な理論モデル」では, タイトル通り, 読み書き障害をめぐる様々な理論モデル(代表として音韻意識(コア)障害仮説, 二重障害仮説, 視覚的認知障害仮説, 小脳障害仮説)を解説している。第5章「スクリーニング・アセスメント・診断基準」では, ディスレクシアのアセスメントや診断の現状と問題点を述べている。第6章「発達障害をめぐるパラダイム論争」では, 学習障害の概念の医学化と教育学化の対立, 学習障害の支援をめぐるエビデンス論と教育実践の論理の対立を指摘する。第7章「障害の併存概念とアスペルガー症候群」では, 異なる発達障害間の併存問題を取り上げ, 要素(モジュール)に分解して分析する視点を批判する。第8章「ひらがなと漢字の読み書き困難(障害)」では, 子どもたちのひらがなと漢字の読み・書きの実態と困難を解説している。第9章「算数・英語・音楽の学習困